

「学問の神様」

豊翔高等学院の3年生も進学に向けての受験や就活を終えようとしている。「合格・不合格」「採用・不採用」の結果が今後の人生の全てではないが、通過点あるいは節目としての意味の大きさを、生徒たちも予想以上に実感しているのではないだろうか？

不安と希望を持って豊翔に入学(転学)してきたあの日から、道のりは決して優しくなく、むしろ険しかったことだろう。親ともぶつかり、先生ともぶつかりながら、自ら進路先を定めそして取り組み、新たな生活への確かな意欲を持ってくれたことに、本当に安堵の想いである。

そう言えばこの時期、学問の神様「菅原道真公」が祀られている福岡県の大宰府天満宮には今年も多くの受験生が訪れたのだろうか？この時期境内の約6000本の梅は満開になり、その情景は壮大で梅の開花時期と受験シーズンの重なりが、天満宮への参拝を呼んでいたに違いない。

菅原道真は、平安時代の嵯峨天皇時代に生まれ、わずか5歳で和歌を詠み、10歳過ぎで漢詩を創作して「神童」と称された。33歳で文章博士となり、若くして学者としての最高の荣誉と地位を得たという。しかし、55歳の時に彼の出世を妬んだ策略にあい事態は急転、大宰府左遷を余儀なくされ、まさに都落ちしたのである。

大宰府天満宮の境内の歌碑にある『東風(こち)吹かば においおこせよ梅の花 主人(あるじ)なしとて春な忘れそ』は、梅の花をこよなく愛した道真が、大宰府へ出発の際に京の御前の梅に想いを残して詠んだ有名な歌である。家族を残しひとり京の都を旅立った道真は、大宰府から一歩も出られない窮迫の日々を過ごし、梅の花びらが散る季節に合わせるかのよう
に、59歳の2月に静かに息を引き取っている。

受験や就活に奮闘した学生たちが、全国各地に点在する菅原道真公を祀った神社で自らの幸運を祈願し、「梅」に込められた別れの想いの意味を知り、やがて離れる恩師や仲間との生活に想いを巡らせたかも知れない。

豊翔を旅立つ卒業生！もう自信を持って進んで欲しい！コロナに振り回されたこの1年間、君たちは我慢を重ね、直向きに前を向き歩み続けて結果を手にした。

梅の季節はもうすぐ終わり、やがて桜前線がやってくる。

『梅の花 咲きて散りなば 桜花 継ぎて咲くべく なりてあらずや』(万葉集)と、新しい出発は満開の桜が祝ってくれる。おめでとう！

(丹羽 豊)